20世紀メンズファッションの革新
——未来派画家ジャコモ・バッラとメンズスーツ——

神部　晴子*

An Innovation on Men's Fashion in the 20th Century
——The Futurist Giacomo Balla & Men's Suits——

Haruko Kambe

要　旨　1910年代、イタリア未来派画家ジャコモ・バッラ（Giacomo Balla）は、当時のメンズスーツに革新的なアイデアを持ち込み、19世紀初頭から続いていたメンズスーツの固定化したスタイルの改革を試みた。同時代のヨーロッパは20世紀初頭にイタリアで誕生した未来主義があらゆる分野に姿を見せ始めた時期でもある。未来主義者はイタリアの伝統に過度の重みを感じ、その歴史的遺産を破壊しようとしていた。次々と宣言を発表し、その全てが破壊しなければならないものに向けられた。そのひとつに1914年5月「LE VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste（未来派男性衣装宣言）」と同年9月「IL VESTITO ANTINEUTRALE Manifesto futurista（未来派反中立衣装宣言）」がある。それは暗い色、対称的なシルエット、糊のきいたカラーやカフスといった伝統的なメンズスーツを廃止し、軽快で、衛生的、そしてダイナミックな色やデザインといった未来派的な新しい衣装を提案したものであった。成功するには至らなかったものの、今でも内容的に高い関心を持たれている。本論文では、バッラが創作した未来派スーツと各衣装宣言に書かれた内容と意味主張について未来派との関連において調べてみた。

Ⅰ　はじめに

現代メンズスーツにみる特徴的な要素のひとつである暗く地味な色、そして控えめな装飾といった固定化したスタイルは、19世紀前半にあらわれた新しい価値観ダンディズムによって形を整え、19世紀後半に現在の紳士服の形を完成させた。それ以降メンズスーツには大きな変化がみられなくなり、その美意識が20世紀まで受け継がれている。

そのようなメンズファッションの歴史の中でスーツの改革というのが幾度か試みられている。

1910年代のローマで活動した未来派画家ジャコモ・バッラ Giacomo Balla（1871～1958）は、保守的な傾向にあった当時のメンズスーツに斬新なデザインを表明した。1910年代から30年代にかけて、ファッションはアートとの関わりを強め、新しい時代に合った美意識、そして新しい衣装の創造に取り組んだ時期であった。アーティストによるメンズファッションの改革が試みられたのもその頃である。

バッラは、1871年トリノに生まれ、美術アカデミーで学んだ後、1895年ローマに移り制作活動に入った。1900年に彼は働きながらパリに6ヶ月間滞在した。そこで彼はアートよりもむしろパリファッションに驚きを憶え、そのことが彼にとって生涯を通じファッションに対し強く鋭い関心を持ち続ける要因のひとつとなる。ローマに戻った後は、画家としての実績を積みながら頻繁に展覧会にも出品していた。

*本学講師　西洋服装史

20世紀初頭の重要な芸術運動の一つとされる未来主義はイタリアで誕生した。未来主義とは、重すぎる伝統と近代国家としての立ち遅れに苛立っていたイタリア青年たちによるナショナルな特殊背景を背負った革新運動である。当初は文学から始まったが、時間を待たずして絵画、彫刻、建築、演劇、音楽、映画など生活芸術全般に広まった。そして同時代のヨーロッパ芸術界に大きな影響を与えた。この運動の第一立役者は詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティF.T.Marinetti（1876～1944）である。彼は1909年2月20日パリの日刊紙『ル・フィガロ』に「未来派宣言」を発表し、抜群の企画力と行動力でこの運動をイタリアの内外に広めた。その宣言文には「この世は新しい美によって輝きを増した。スピードの美である。レーシング・カーの車体は激しく息を吐く蛇にも似た大型のパイプで飾られている。散弾上を走っているかのように叫ぶ自動車は、サモトラケの勝利の女神ニケよりも美しい。」「今日の美は闘争の中のみにある。」といった言葉が書かれ、イタリアの若者の参加を呼びかけた。彼らは文化や政治にみられる過去の遺産と伝統的な価値を一切否定し、スピードと機械工学の戦争で象徴される現代のダイナミズム、そして攻撃的な愛国主義を貫いた。すなわち未来派の使命とは、力および運動の感覚を起こさせることにあるとし、そこには速力、冒険、闘争、盲目的な愛国精神、機械の賛美があった。

この未来派宣言の翌年、1910年2月、バッラはマリネッティのすすめで弟子のボッチョーニU.Boccioni、セヴェリーニG.Severini、カッラC.Carra、ルッソロL.Russolo[1]とともに「未来派画家宣言」に署名し、「新時代に生きるためにふさわしい生活と様式を創造し、その発表を必要とする。このためには一切の過去を破壊して新しいものを建設しなくてはならない」と宣言した。以後1910年から1916年にかけて音楽、彫刻、建築、映画などの多彩な分野に渡り、未来派の活動としての一大特徴とされる各種宣言が続々と発表された。

メンズスーツをめぐるバッラ署名の最初の宣言は1913年5月LE VÊTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste（未来派男性衣装宣言）である。続いて1914年9月IL VESTITO ANTINEUTRALE Manifesto futurista（未来派反中立衣装宣言）が発表された。

バッラに関しては近年、幾度か展覧会が開かれていることから内容的にも関心の高いことがわかる。1996年夏のモスクワにおけるバッラ展[2]、またバッラや当時のアーティストの活躍をたどった1997年ニューヨークにて「アートとファッション展*ART/FASHION*[3]」、そして1998年ロンドンにて「世紀みつめて*Addressing the Century*[4]」などがある。最近では、1998年の冬、ローマにおいてバッラ展が開かれ、今でも注目されている。

これらのカタログから見る限り、現在の我々においてもその創意には惹きつけられる。発想の新しさ、ユニークさには眼をみはるものがあり、また数多くのデッサンが残っていることからも、興味がそそられる。それが今でも風化しない理由であろう。私はこの着想が、どういうことから生まれたのかを知りたいと思い、そこから未来派に興味を抱き本論文をまとめるに至った。そこで、バッラの発想を知るために、先の二つの宣言を詳細に読み取ることにした。資料には未来派に関する最近の研究書、エンリーコ・クリスポルティによる『未来派とファッション』（Crispolti, E.*IL FUTURISMO E LA MODA*）[5]を主に使用した。

Ⅱ　バッラの未来派スーツの創作

1912年7月18日にデュッセルドルフから、ローマの家族に宛てた手紙がある。この年はマリネッティの運動に参加し画家宣言に署名した2年後のことである。またファッションの分野において未来主義者たちがはっきり関心を示した初出の史料のひとつとされている。

「私の衣装は大好評である。とりわけ明るく格子柄の最新作は脱ぐわけにもいかず着た

ままで街にくりだすはめになったが、人々には好奇の目でじろじろ見つめられてた。こんなことは滅多にないことだからこれからも着続けるよ。[6]」

デュッセルドルフには個人教授をしていた生徒の一人、ローヴェンシュタイン夫人の家の室内装飾をするために滞在していた。その最新作の衣装は「明るく」、「格子柄」というもので、これ以降バッラの意匠には見られない。また制作時期ははっきりしておらず、むしろ習慣としてこうした衣装を着用していたと考えられている。彼は同年の秋に再びデュッセルドルフに訪れ、その折に家族に宛てた書状の中で、次のように言っている。

「白い紐のついた黒服は好評作。ローヴェンシュタイン夫人は自分にもエリーザ（バッラの妻）にビロードで作ってほしいと言っている。（バッラの妻は家でこのような衣装を作成していた。）　夫（ローヴェンシュタイン氏）がローマに行った際にデュッセルドルフに持ち帰ってほしいと頼まれた。（1912年11月18日）[7]」

これは、1912年の夏に作成されたもう一着の未来派衣装を指している。この衣装は現存するデッサン（図1）とほぼ一致し、上着は衿なしで白く縁取られている。ズボンにも同様の白い縁取りがあった。エリーザのためにビロードで、というのはこの衣装が女性服と共通できる点で、後の未来派の女性服に対するプランが既にこの時点であったことがわかる。しかしながら、当時、バッラの関心はもっぱら男性用でしかも自分自身のものであった。これら2通の書簡以前の衣服に関する記録はみられないが、その年に描かれた2点のデッサンが現存する。バッラは、当時未来派の衣装係り的存在であった。クリスポルティは、デュッセルドルフで着用されたものとともにこれらをバッラの未来派男性衣装プラン第1期としている[8]。デッサンは白い縁取りの衣装と類似したもので、一点はスーツ、シャツ、帽子、靴、手袋で、そのスーツは黒無地の衿なしで前身頃が高い位置で斜めに裁断され、シャツは衿を折りたたみ三角の小さなネクタイをつけている。ズボンも無地である。帽子にはつばがあり2本のテープがついた多角形である。白い手袋には黒のマークが入り、靴は白と黒の2色使いで、そこにはステッキも描かれている。一見エレガントな外出着である（図2）。もう一点は、上着、シャツ、三角形のネクタイである（図3）。三角形は運動経路という未来主義の原点を表現し、その象徴であった。

他方、当時のバッラについてマリネッティは1930年代の初めに思い出として語っている。

図1　1912年のデッサン
個人蔵

図2　1912年のデッサン
個人蔵

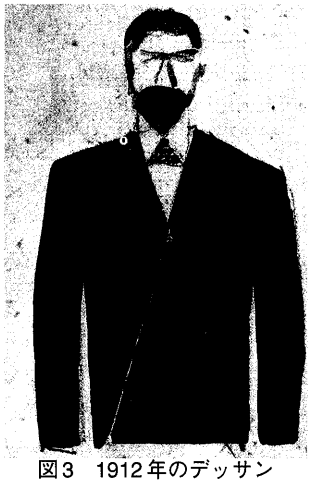


図3　1912年のデッサン
個人蔵

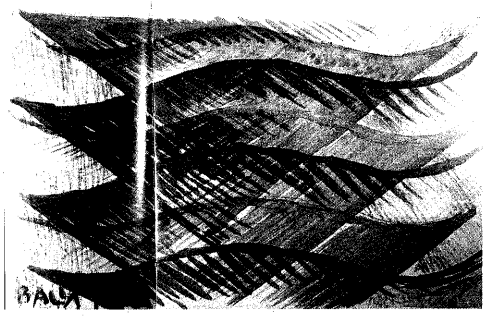


図4　1913年のテキスタイルデザイン、個人蔵

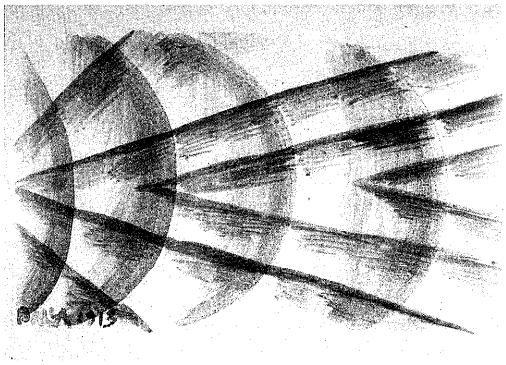


図5　1913年のテキスタイルデザイン、個人蔵

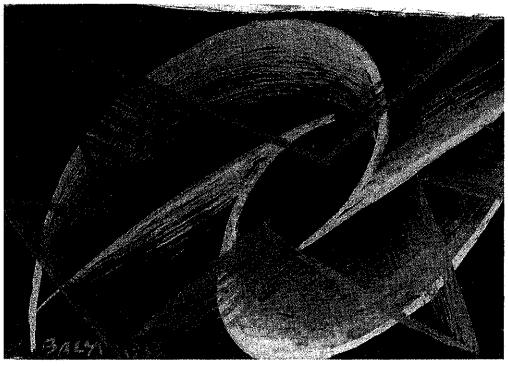


図6　1913年のテキスタイルデザイン、個人蔵

「直立不動で、アシンメトリーの鮮やかなブルーのジャケットを着込み、小さなガラス片と小さな鈴と金箔をかぶせた木片とで飾ったネクタイの上に腕を組んで立っていた。[9]」

このように、バッラは1910年代初めから自ら独創的な衣装に身を包んでいたことがわかる。

彼は、1912年の初めの何ヶ月かは、未来派衣装というよりもむしろ自分のための衣装をイメージし、自分自身の個性的なイメージを衣装に提起したと考えられている。そこには二つの要点があった。一つは経済的な理由により家具や衣服に至るまで全て自分自身で作り上げていたことによる実用性やシンプルさを感覚的に身につけていたこと、二つめは自分の個性でその存在を示す強い意思と独自性であった。そこで彼は、時代が求める実用性やシンプル性に新しい威信を与え、革新的芸術家として着こなし、独自の非凡なエレガンスの法則を備え、空想的でしかもはっきりとした新しさを持って、と言うことであった[10]。そして、彼が未来派に同調し始めるのは1913年に入ってからで、未来派のグループ展に最初に登場するのと同じ頃である。1911年の未来派の理論を具体化する最初の試みであったミラノの展覧会には出品せず、1913年のローマでの未来派展に初めて参加した。未来派は1912年の2月にパリで開かれた展覧会が広く注目され、その後ヨーロッパ各地に巡回された。その年は未来派がイタリアの一地方の運動ではなく国際的な革新芸術のひとつとしての位置を占めるようになった年であり、日常の各場面で未来派的革新が認められた時期でもあった。

1913年、バッラは未来派のテキスタイルデザイン（図4，5，6）を発表する。それは1912年にデザインし作成された服に見られた「格子柄」、「無地」を一掃するためであった。そこには、1912年から13年にかけて展開された動的分析における複雑なモチーフをテキスタイルデザ

インとして取り込む考えが欠如していたからである[11]。そして、このテキスタイルデザインが1914年の彼の最も知られた服のデザイン（図7, 8, 9）に当てられた。カッティングに関しても、ラインが一層強調されていることがわかる。この時の服のデザインは、色の指定は異なっているがその年に発表された各宣言のリーフレットに使われた服のデザイン2点に一致している。そのため、1913年のテキスタイルデザインと1914年の服のデザインは一連の仕事で1913年末から14年初期と推定され、共に宣言のために作成されたと考えられている[12]。

Ⅲ　LE VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste

1914年5月20日、バッラ署名によるLE VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste（未来派男性衣装宣言）（図10）が発表される。この時点ではフランス語版のみであった。未来派にとってこの年は、未来主義運動の努力が最高潮に達し、彼らが最も高揚した時期である。

「未来派男性衣装」
宣言

人々は常に喪服か19世紀から続いている重苦しい鎧、そして堅苦しく退屈なマントを着ている。男性の体は常に黒い色で悲しみ、またベルトに縛られ、あるいはドレーパリーに押しつぶされてきた。

中世やルネサンスの間を通して衣服は常に色を持っていた。そして変化のない重苦しいフォルム、そして厳粛で聖職者的なドレープは不快で扱いにくい。それらは憂愁、束縛、圧制の表現であった。そして筋肉の生命力の否定でもあり、非常に重たい生地で退屈な色彩の反衛生的な中で充分に使われてきた。

なぜか、今日路上の群集、劇場は、悲しいリズム、葬式、憂鬱を持っている。

「今日我々は廃止しよう」

1、葬儀屋自身も喪服着用を拒もう。
2、色あせて、中立で、くすんだ、暗い色。
3、縞模様、格子柄、小さな水玉模様の生地。
4、いわゆる趣味のいい色合いのハーモニー。
5、裁断の均整、うんざりした憂愁、静止したラインの画一性。不可解な装飾全て。
6、不必要なボタン。
7、糊のきいたカラー、そしてカフス。

我々はゆったりとした懐旧の情や重圧から人々を開放したい。

群衆を未来派によって色づけ、若返らせたい。そして男性に美しく陽気な衣装を与えた

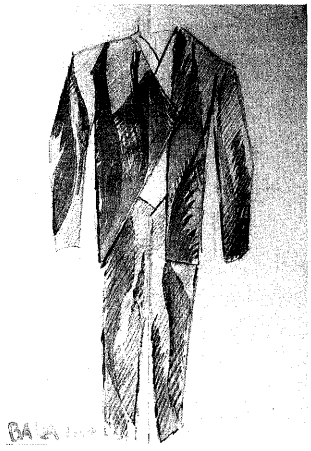


図7　1914年の服のデザイン
個人蔵

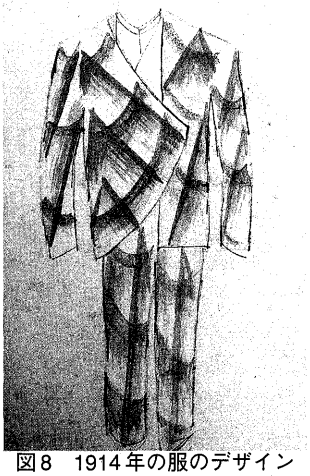


図8　1914年の服のデザイン
個人蔵

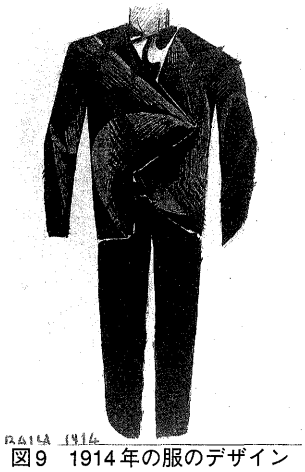


図9　1914年の服のデザイン
個人蔵

い。

「未来派衣装は次のようにあるべきである。」

1、ダイナミック。ダイナミックな色づけとデザインの生地。

2、非対称。例えば、袖の先と上着の前面は右が丸く、左が四角。ベスト、パンツ、コートも同様に。

3、軽快。胴体の柔軟性を高め、そのはずみを助けるのに適していること。

4、シンプルで簡単。着脱が簡単。ある程度のボタンは必要である。

5、衛生的。全ての毛穴が自然に呼吸できるカッティングであること。窮屈なものすべて、きつく締めたベルトも避ける。

6、楽しさ。明るい虹色の生地。筋肉のような色、紫、赤、緑、青、黄、オレンジ、朱。

7、輝き。周囲に光を強く放つ発光性の生地。雨が降った時、わびしさ、メランコリー、黄昏を和らげる。

8、意欲的。激しく、攻撃的な色。白、グレー、黒。

9、飛行。色調のグラデーションによる雰囲気、ダイナミックなラインを結びつけること。

10、非耐久性。身体の活気を取り戻し、そして繊維産業を優遇できる。

11、変化。「修正」の効果による。絶えず新しい服を考案する。

服の多様性に途方にくれるであろう。このダイナミックな服が騒々しい道路の中を走る。そして宝石屋の巨大なショーウィンドウのあちこちに未来派衣装が増えるだろう。

ミラノ、1914年5月20日

画家ジャコモ・バッラ

実は、この宣言が出されるにあたっての手書き原稿（図11）が1963年トリノにおけるバッラの初めての大回顧展準備の折に発見され同展覧会カタログに報告された。1913年の末から1914年の初めにかけて作成され、タイトルは同じである。バッラはこれをマリネッティに宛てた。マリネッティは当時、未来派運動本部公式発行物の作成総監督、兼エディター代表者であった。翻訳にもマリネッティが当たっている。この手書き原稿は、1914年に入った数ヶ月後にマリネッティや他の活動家との討議をした上で削除や追加を行い新たに修正された。この修正原稿が下地となりミラノの未来派運動本部からLE VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifesteとして公式発行された。原稿はいずれも公式発行フランス語版と同じ形式で、序論、否定的な内容を示す部分、未来派衣装を提案した部分、結論から成っている。

手書き原稿の序論は後になって消されているが、判読は可能である。

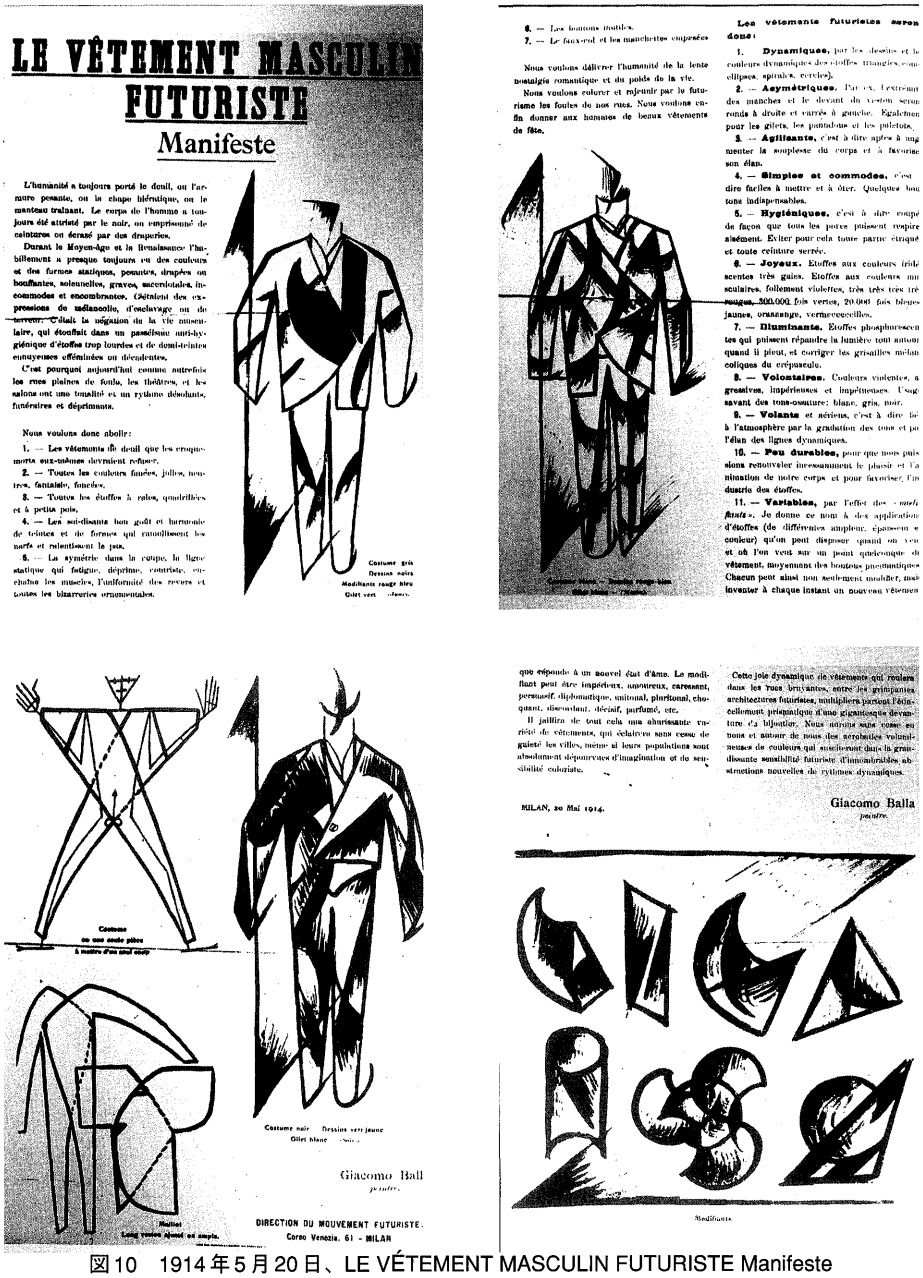
「我々未来派は革新という偉業を限られた期間で執行する、久しく思いこまされてきたあらゆる因習はいかなるものか討議する、近代の希求する簡素さにおいていまだに服装はひどく保守的である[13]。」

次に、否定的内容については、

「消滅させよ、うわべのみで、色あせ、陰鬱で、すさみ、退屈で、不衛生な保守派衣装を。廃止すべき生地は、綺麗なだけで、空想的で、中立で、くすんだ色で、縞やら格子柄や水玉の柄。カッティングや仕立てについては、均衡のとれたライン、野暮な折り返しや装飾、糊のきいたカフスや衿といった画一性の廃止。停止すべきは喪服のような偽善的な見てくれだけの良さ。路上、劇場、カフェの群集に悲しげな伝統が反映してしまっている[14]。」

続く、未来派衣装を提案した内容については、

「未来派衣装創出が必要である。大変楽しく、粋で、多色、ダイナミック、シンプルなライン、非耐久性で繊維産業を促進し、我々の肉体に快楽を絶え間なく与えるもの。使用すべき生地は筋肉色、極めの紫、赤、青、黄、オレンジ、朱、白、灰、黒の色調構成のもの。抽象的な三角、円錐、螺旋、楕円、



LE VÊTEMENT MASCULIN FUTURISTE

Manifeste

L'humanité a toujours porté le deuil, ou l'armure pesante, ou la chape hiératique, ou le manteau traînant. Le corps de l'homme a toujours été attristé par le noir, ou emprisonné de ceintures ou écrasé par des draperies.

Durant le Moyen-âge et la Renaissance l'habillement a presque toujours eu des couleurs et des formes statiques, pesantes, drapées ou bouffantes, solennelles, graves, sacerdotales, incommodes et encombrantes. Générent des expressions de mélancolie, d'esclavage ou de terreur. C'était la négation de la vie musculaire, qui étouffait dans un passéisme anti-hygiénique d'étoffes trop lourdes et de demi-teintes ennuyeuses efféminées ou décadentes.

C'est pourquoi aujourd'hui comme autrefois les rues pleines de foule, les théâtres, et les salons ont une tonalité et un rythme désolants, funéraires et déprimants.

Nous voulons donc abolir:

1. — Les vêtements de deuil que les croque-morts eux-mêmes devraient refuser.
2. — Toutes les couleurs fanées, jolies, neutres, fantaisie, fonées.
3. — Toutes les étoffes à raies, quadrillées et à petits pois.
4. — Les soi-disantes bon goût et harmonie de teintes et de formes qui ramollissent les nerfs et ralentissent le pas.
5. — La symétrie dans la coupe, la ligne statique qui fatigue, déprime, contriste, enchaîne les muscles, l'uniformité des revers et toutes les bizarreries ornementales.
6. — Les boutons inutiles.
7. — Le faux-col et les manchettes empesées

Nous voulons délivrer l'humanité de la lente nostalgie romantique et du poids de la vie.

Nous voulons colorer et rajeunir par le futurisme les foules de nos rues. Nous voulons enfin donner aux hommes de beaux vêtements de fête.

Les vêtements futuristes seront doux:

1. **Dynamiques**, par les dessins et le couleurs dynamiques des étoffes triangles, ellipses, spirales, cercles).
2. — **Asymétriques**. Par ex. l'extrémité des manches et le devant du vêtement seront ronds à droite et carrés à gauche. Également pour les gilets, les pantalons et les pardessus.
3. — **Agilisants**, c'est à dire après à augmenter la souplesse du corps et à favoriser son élan.
4. — **Simples et commodes**, c'est dire faciles à mettre et à ôter. Quelques boutons indispensables.
5. — **Hygiéniques**, c'est à dire coupé de façon que tous les pores puissent respirer aisément. Éviter pour cela toute partie étriqué et toute ceinture serrée.
6. — **Joyeux**. Etoffes aux couleurs irisé scentes très gaies. Etoffes aux couleurs mu sculaires, follement violettes, très très très tré rouges, 300.000 fois vertes, 20.000 fois bleues jaunes, orangeange, vermeveceeilles.
7. — **Illuminants**. Etoffes phosphurescentes qui puissent répandre la lumière tout autour quand il pleut, et corriger les grisailles médiocres du crépuscule.
8. — **Volontaires**. Couleurs violentes, agressives, impérieuses et impétueuses. Usage savant des tons-ossature: blanc, gris, noir.
9. — **Volants** et aériens, c'est à dire lié à l'atmosphère par la gradation des tons et par l'élan des lignes dynamiques.
10. — **Peu durables**, pour que nous puissions renouveler incessamment le plaisir et la sensation de notre corps et pour favoriser l'industrie des étoffes.
11. — **Variables**, par l'effet des « *modifiants* ». Je donne ce nom à des applications d'étoffes (de différentes ampleur, épaisseur et couleur) qu'on peut disposer quand on veut et où l'on veut sur un point quelconque du vêtement, moyennant des boutons pneumatiques. Chacun peut ainsi non seulement modifier, mais inventer à chaque instant un nouveau vêtement

Costume gris
Dessins noirs
Modifiants rouge bleu
Gilet vert

Costume
en une seule pièce
à mettre d'un seul coup

Costume noir Dessins vert jaune
Gilet blanc

Giacomo Ball
peintre.

Modifiant
Long voulant ajouté ou simple.

DIRECTION DU MOUVEMENT FUTURISTE.
Corso Venezia, 61 - MILAN

que réponde à un nouvel état d'âme. Le modifiant peut être impérieux, amoureux, caressant, persuasif, diplomatique, unitonal, pluritonal, choquant, discordant, décisif, parfumé, etc.

Il jaillira de tout cela une ahurissante variété de vêtements, qui éclairera sans cesse de gaieté les villes, même si leurs populations sont absolument dépourvues d'imagination et de sensibilité coloriste.

Cette joie dynamique de vêtements qui roulent dans les rues brillantes, entre les grimpantes architectures futuristes, multipliera partout l'intellectualisme primitif d'une gigantesque devanture d'a bijoutier. Nous aurons sans cesse en nous et autour de nous des acrobaties volumineuses de couleurs qui susciteront dans la grandiosante sensibilité futuriste d'innombrables abstractions nouvelles de rythmes dynamiques.

MILAN, 20 Mai 1914.

Giacomo Balla
peintre.

Modifiants

図10　1914年5月20日、LE VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste

円などのダイナミックな柄。非対称なラインのカッティング、袖や上身頃の左は丸く、右は四角く、ベスト、ズボン、コートも同じくしつらえる[15]。」

最後の結論については、

「新未来派建築から変容される騒々しい道へ移動する衣服のこのきらめく楽しさは、宝石やの巨大なショーウィンドウの素晴らしいプリズムのように輝く。我々は以下の言葉のようにアクロバットのような色彩を待ち続けよう。

Cafeangrocase Rosverbastocap

tranportautom gambrotainenegos
Turchinorbiancase areosigaresto
Cielotettascensorgialbastro
Afiscinemafot Barbafinesviol[16)」

とある。続いて消去された部分を判読すると、「我々未来派衣装の鮮やかさは、偉大な友、パラッツェスキの主張を助けることができる[17)]。」

この部分の削除は1914年4月イタリアの詩人アルド・パラッツェスキPalazzeschi,A.（1885-1974）が未来派から分離したためである。

最後に「マリネッティへ」、署名「バッラ」で終わる。そして、「女性服のため未来派宣言を出す」と続く。

手書き原稿に修正が加えられた後、公式発行フランス語版となるまでにどのようにバッラの考えが変化していったのであろうか。

手書き原稿の序論には反論があって後に消されたと言われる。内容を比較すると、手書き原稿における表現は固い。しかし、公式発行フランス語版では19世紀から続いている男性の重く暗い服装について衛生面、色彩面から否定した。言葉自体は具体的になり、わかりやすくなった。

続く否定的内容と未来派衣装を提案する内容についてはいずれも趣旨としての大きな変化はみられないが、大きく分けた番号を修正の時点で付け加え、公式発行フランス語版になると、それぞれの内容ごとに構成番号を付けて箇条書きにしたことで、非常にわかりやすくなり、多くの部分で詳述された。また、言葉も印象に残るものを用い、表現自体が明確になった。例えば未来派衣装を提案する内容では、修正の段階で、積極的、意欲的、激しい、飛行的、軽快、陽気、光るフォルムや色、りん光が加わり、公式発行フランス語版でこれらは間接的に要約されたり、組み込まれた。また、未来派の最新の方向として「多様性」という新たな要素を修正の際に提示している。また公式発行フランス語版で否定的内容の中に4、趣味のいい色合い、6、不必要なボタンが加わった。

そして最後の結論部分についても大きな変化はみられない。

このように、手書き、修正、フランス語版の内容については特別大きな変化はみられないが、手書き原稿に修正が加えられた段階で形容的表現が新たに幾つか加わったり、ラインに関

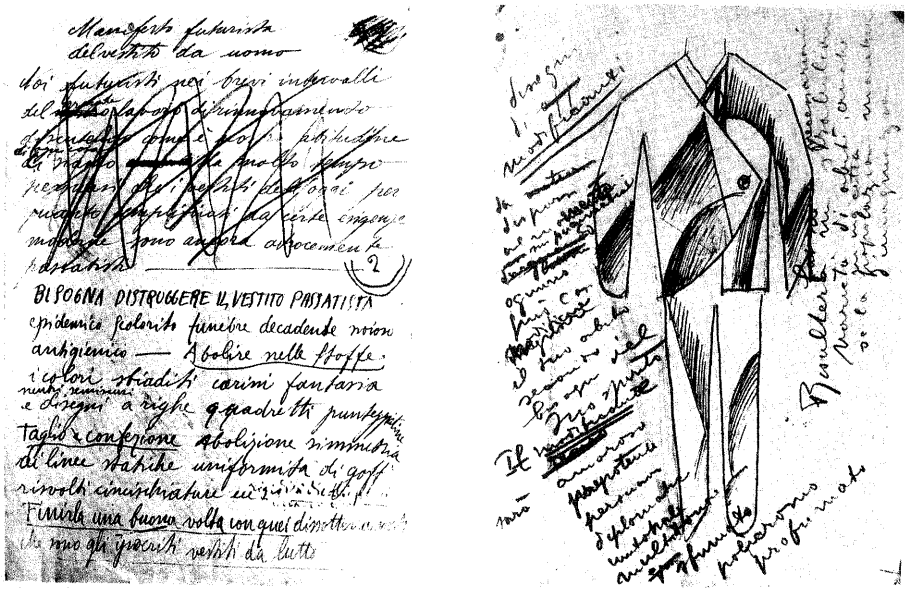


図11　手書き原稿の一部

しては抽象的な表現となった。これには芸術家としての未来派的考えが入ってきたと考えられる。

デッサンに関しては手書き原稿、公式発行フランス語版、同年の9月11日に発行されるイタリア語版の3点とも類似したものではあるが決して同一ではない。

Ⅳ IL VESTITO ANTINEUTRALE Manifesto futuriata

1914年9月11日 IL VESTITO ANTINEUTRALE Manifesto futurista（図12）が発行された。

「未来派反中立衣装」
宣言

「我々は戦争を支持する、世界の唯一の衛生法なのだから。」マリネッティ
（第一回未来派宣言1910年2月20日）

「アシナーリ・ディ・ベルネッツォ万歳！」
（第一回未来派の夕べ
1910年2月ミラノオペラ座）

人類は常に平穏で、慎重で、用心深く、おどおどとした身なりをして、常に喪服や宗教服を着用してきた。肉体は常にぼやけた中立の色調で小さく表現され、黒色で意気を弱めさせ、ベルトで締め上げられ、ひだで覆われてきた。

今日まで人類は均衡のとれた色彩とフォルム、つまりドレープが入ったり、儀式用だったり、不便で、聖職者用といった衣装を用いてきた。それらは消極性、憂鬱、束縛感を感じさせ、筋肉の動きを阻止し、重過ぎるもので、うんざりするような、弱々しくすさんだ不鮮明の色調の生地における過去主義の不衛生には息苦しさを感じてきた。苦悩的、葬的、暗澹な色調とリズムである。

「今日、我々は廃止しよう」

1、中立、退屈、ファンタジー、そして薄暗い全ての色調。
2、規則的、教師風な色調とスタイル。縞模様、格子柄、水玉模様。
3、喪服、墓掘人にさえも不適当。英雄の死は哀れむものでなく、赤い服で追悼しよう。
4、平凡なバランス、いわゆる趣味の良さ、色調においてフォルムにおいてのいわゆる調和、これらは熱狂心を悪とし歩みを緩慢にさせる。
5、シルエットの対称性、安定したラインは、疲労化させ意気を弱めさせ悲哀をもたらし、筋肉をくくりつける。野暮ったい折り返しやすべての装飾の画一性。不要なボタン。糊のきいたカラーやカフス。

我々未来派は、あらゆる中立からおどおどした事勿れ主義の範疇から、拒絶的悲観主義からノスタルジックで現実離れした軟弱さから、我々の種を開放し、斬新に未来派の責でイタリアを着色し、好戦的で愉快な装いをイタリア人に与えたい。

「未来派衣装は次のようにあるべきである」

1、積極的。強者の勇気を高揚し臆病な感覚を喪失させるもの。
2、軽快。肉体の柔軟性、闘争での士気を高めるもの。
3、ダイナミック。生地はダイナミックな柄と色。それは速度、攻撃、そして平穏や不動への憎悪をもたらす。
4、シンプルで簡単。着脱が楽であること。そして川を渡り泳ぐのに適応したもの。
5、衛生的。長い歩行、困難な上がり道でも皮膚が呼吸出来るようなもの。
6、楽しさ。熱狂的な色彩、虹色の生地。筋肉の色、極めの紫、赤、青、緑、黄、オレンジ、朱を使用。
7、発光。りん光を発する布。それは憶病者たちの集会で恐れをあおる。雨の時も発光する。更に路上で日没後の暗さを明るくする。
8、意欲的。戦場における命令のように激しく、傲慢で衝動的な柄と色彩。
9、非対称的。袖口や上着身ごろの右は四角

く。非凡な反撃的ライン。

10、非耐久性。肉体の絶え間ない快楽と生気を回復させる。

11、多様性。変化の手段（異なる生地、幅、厚み、柄、色彩）はいつでもどこでも自由に。そうすれば各人がいつでも好きな服を創出できる。変化は横暴で、不快で、当惑的で、決定的で、戦闘的である。

未来派の帽子は、非対照的で攻撃的で陽気な色。未来派の靴は、ダイナミックで左右で形も色も異なり、全ての中立主義者を蹴り飛ばすにふさわしい。

衣装を身に付けることは、行動、思考と同じである。中立は、全過去主義者の総合である。我々未来派は反中立的に、楽しく好戦的に着こなす。

年寄りは同調しないであろう。

イタリアの全ての若者は、認めるであろう。不可欠で緊急の大戦のために我々が携えている輝かしい未来派の旗を。

政府が恐れと不決断の過去主義者的装いを破棄しないなら、我々が着ている三色旗の赤を200倍にも100倍にもする。

ミラノ、1914年9月11日
ジャコモ・バッラ
未来派運動指導部及び全イタリア
未来派グループの同意による

これは5月11日に発行された宣言のイタリア語版である。この時まで未来派運動本部はイタリア語版を発行しないが、度重なる運動表明の中で、この時期において未来派評論の関心がまたたく間に広がったことを認識したからであった[18]。「未来派男性衣装宣言」とあったタイトルは「未来派反中立衣装宣言」と変更された。すでに「中立」という表現がフランス語版、イタリア語版ともに見られるが、そこでは廃止すべく衣装の色の一つとして使われ、どっちつかずの色や中間色を意味していると考えられる。しかしここでは中立国への対抗を意味する「反中立」という意味で強く表現した。当時ヨーロッパでは、6月28日、オーストリアの皇位継承者がボスニアのサラエボで暗殺された（サラエボ事件）ことを受けて、一ヶ月後の7月28日、第一次世界大戦が勃発した。8月に入りドイツが宣戦布告してから急速に戦火は広まったが、ドイツの友邦であったイタリアは、オーストリア＝ハンガリーとの領土問題から8月2日に中立宣言を発表した。好戦主義者であったマリネッティは参戦的反中立という意味で「反中立衣装」という表現に変更した。特に戦争に対しては結論の部分で直接言及し、中立的立場を攻撃している。すなわち、イタリア語版では政治的性格が強く反映していた。

バッラはイタリア語版に施された方針の変更の際、1915年末に展示することになる連作にとりかかっていた。そのためか、後の家族による回想の中で、「バッラはこのような変更にあまり賛成ではなかったが受け入れた[19]」とある。また、マリネッティが未来派衣装を三色旗で構成するという案に対するバッラの当惑[20]もあった。また「イタリア語版は、オリジナルとは全く異なる。マリネッティは宣言を利用し、文章のみならずバッラのデザインまでもルッソロ、ボッチョーニらの作とするにまで及んだ。その意図は、マリネッティの戦略に未来派の集団、統一の意志を公式化することにあった[21]」とも言われている。しかし、実際にはバッラは納得し、マリネッティが独占的に介入したわけでもなく、デッサンも彼自身のものであった[22]。事実、宣言は既に5月にフランス語版が発行されていたのであり、バッラの了解なしとは考え難い。マリネッティは恐らく、運動の政治的倫理的の目的にかなった機能的な版を求めていた[23]。

しかしながら二つの宣言の内容を比較しながら読み進めていくと、この新宣言の内容の基本的な概念はほぼ一致している。伝統的なメンズスーツの暗い色は重く、ベルトで体を締め付け、筋肉の動きは妨げられ、精神的にも憂鬱で、不衛生である。未来派の新しい衣装はいわゆる“趣味の良さ”やすべての調和と安定した単調さ

を崩し、未来派の存在を通して群衆をダイナミックに、そして陽気に若返らせ、色付けるよう提案している。そして序論では、イタリア語版で平穏、慎重、用心深い、おどおどとして、など抽象的な表現が加わったものの、同じように憂愁で不衛生、不鮮明な色調であるとしている。続いて、否定的な内容については、羅列順序が異なるが、番号を整え簡潔にし、幾つか表現が加わった。例えばイタリア語版2では、「規則的、教師風な色調とスタイル」がフランス語版3の「縞模様、格子柄、水玉模様」に加わった。フランス語版1の「喪服着用の廃止」にはイタリア語版3で「赤い服で追悼」が追加した。イタリア語版、フランス語版ともに4の「いわゆる趣味の良さや色合い」はイタリア語版で「平凡なバランス」が追加された。イタリア語版5の「対称的なラインは悲哀をもたらし、筋肉を縛り付け、そして画一的な野暮な折り返しや装飾の画一性、不必要なボタン、糊のきいたカラー、カフス」はフランス語版の5、6、7である。そして結びの、フランス語版「若返らせ陽気な衣装を与えたい」についてはイタリア語版では触れておらず、「斬新に未来派の責でイタリアを着色し、好戦的愉快な装いをイタリア人に与えたい」ときっぱりとした表現に変わり、反中立を展開させている。そして言葉自体を好戦的に変化させることによって、新しい衣服の闘争的な特徴があらわにされた。ここで注目すべき点は、フランス版も同様であるが、「今日我々は廃止しよう」で、未来派宣言における集団の意思でバッラ個人のものではない。イタリア語版では特に最後で「未来派イタリア運動指導部、及び全イタリア未来派グループの同意による」とあり、我々未来派が自分たちの言葉を通しての形になっている。

未来派衣装を提案した内容についても、それぞれ順番が異なるが、内容的にはイタリア語版は実践的な性格をもつ。イタリア語版1「積極的」は、手書き原稿に見られ、フランス語版では存在せず新たに盛り込まれた。イタリア語版2、フランス語版3「軽快」は、「闘争での士気を高める」と明確にされた。イタリア語版3、フランス語版1「ダイナミック」は生地の柄や色彩の闘争的なねらいがイタリア語版に新しく入った。ここからはイタリア語版、フランス語版とも順番は同じだが、強調点が異なる。4「シンプルで簡単」はイタリア語版でボタンに関する記述が削除され、実践的なあり方が述べられている。5「衛生」は圧迫についてのフレーズがイタリア語版ではなく、行動的な面「長い歩行、困難な道でも皮膚が呼吸出来るように」が加わった。6「楽しさ」は同様。7「発光」では、「怖がりたちの集会で恐れをあおる」が付け加えられた。8「意欲的」は「戦場における命令のように激しく傲慢で衝動的な柄と色彩」というように実践的なものとなった。イタリア語版9「非対称」は、フランス語版2で、ラインは上着以外のベスト、ズボン、コートに関しては除かれた。（フランス語版9「飛行」はイタリア語版にはない。）10「非耐久性」は繊維産業の発展に関する言及が欠如された。11「多様性」は好戦的な言葉で表現された。

続く結論の「未来派の帽子は非対称で攻撃的

IL VESTITO ANTINEUTRALE

Manifesto futurista

Glorifichiamo la guerra, sola igiene del mondo.
MARINETTI.
(Manifesto del Futurismo - 20 Febbraio 1909)

Viva Asinari di Bernezzo!
MARINETTI.
(Manifesto futurista - Teatro Lirico, Milano, Febbraio 1910)

L'umanità si vestì sempre di **quiete, di paura,** di **cautela** e d'**indecisione,** portò sempre il lutto e il privato, e il mantello. Il corpo fu sempre diminuito da sfumature e da tinte **neutre,** avvilito dal nero, soffocato di cravatte, imprigionato da panneggiamenti.

Oggi noi vogliamo marinare nudi di entusiasmo e forme statiche, cioè drappeggiati, solenni, e voluttuosamente convenzionali. Evitiamo espressioni di indolenza, di malinconia e di **schiavitù,** negazione della vita muscolare, che soffocava il suo possentissimo antelegenico di stoffe troppo pesanti e di nozze tinte tedesche, effeminate o decadente. Tessalità e ritmi di **pace desolante,** lamentato e deplorante.

OGGI vogliamo abolire:

1. — Tutte le tinte **neutre,** - carine -, abbiate *Futuristi,* semplicemente e nudilanti.

2. — Tutte le tinte e le foggie pedanti, professorali e tentennoliche. I disegni a righe, a quadretti, a **puntini diplomatici.**

3. — I vestiti da lutto, nemmeno adatti per i funerali. Le nozze eroiche non devono essere compiute, non incontrate con vestiti neri.

4. — L'opinione **mediocrista,** il conseguimento giusto e la conquista armonia di tinte e di forme, che formano gli entusiasmi e rallentano il passo.

5. — La simmetria nel taglio, le linee **statiche,** che simmetria, depressione, contristano le donne e nascondono l'entusiasmo di goffi fascioli e tutte le cipriamentarie. I bottoni inutili. I colletti e i polsini mandolati.

Noi futuristi vogliamo liberare la nostra forza da ogni **neutralità,** dall'indecisione politica e guerresca, dal pessimismo in genere e dall'inerzia

Vestito bianco - rosso - verde
del parolibero futurista Marinetti. (Mattino)

図12　1914年9月11日
IL VESTITO ANTINEUTRALE Manifesto futurista（1ページ目）

で陽気な色」、「未来派の靴はダイナミックで左右形も色も異なり全ての中立主義者を楽しく蹴り飛ばすにふさわしい」は、イタリア語版で挿入された新しい要素である。「中立は全過去主義の総合で、未来派は反中立的に、楽しく好戦的に着こなす。イタリアの全ての若者は認めるであろう。我々が携えている不可欠で緊急の大戦のために未来派の旗を。不決断の政府に対して未来派は身につけている三色旗の赤を増大させる。」というようにイタリア語版では決定的に好戦的で、衣装を輝かしい未来派の旗に変え、三色旗の服を通し反中立の宣伝をするという彼らの思想と宣伝の道具としての未来派衣装の役割が認められる。

デッサンに関してはフランス語版と同一であるが、解説が異なる。フランス語版1ページ目は「グレーの服、黒のデザイン、赤と青で変化させる、緑のベスト、昼用」が、イタリア語版では「白、赤、緑の服。未来派自由語詩人マリネッティ、朝用」となった。フランス語版2ページ目は「白い服。赤、青のデザイン、白のベスト、朝用」とあるのに対し、イタリア語版では「白、赤、緑の服」すなわちイタリアの三色旗である。3ページ目にある「多様性」については「楽しく好戦的」がイタリア語版で加わった。4ページ目、右はフランス語版では「黒い服。緑、黄色のデザイン、白のベスト、夜用」とあるが、イタリア語版では「未来派画家・彫刻家ボッチョーニ。白、赤、緑の服、夜用」。4ページ目、右上「体を1枚の布で着こなす衣装」はイタリア語版では「未来派カッラによる1枚仕立ての赤い服」になった。右下の「長くたっぷりとしたシャツと上着の組み合わせ」はイタリア語版で「未来派効果音係、自転車部隊志願ルッソロの緑のシャツと赤と緑の上着」と変化した。

V　おわりに

「Le VÉTEMENT MASCULIN FUTURISTE Manifeste」の手書き原稿には「次回は未来派女性衣装宣言」という予告があるように、バッラは女性衣装よりも男性衣装に優先順位を置いた。それは男性衣装が女性衣装に比べて近年、変化や新奇性、自己表現に欠けていたからであった。そこで未来派衣装は社会の前面に出ていた男性に向けられたのである。その煽動的な攻撃は、未来派がこきおろす伝統的で憂愁な環境のみでなく、社会の代表者に対してであった[24]。

未来派は宣言だけでなくデモストレーションも行っている。バッラが参加したイヴェントとしては1914年12月11、12日、ローマ大学で行われた。それは反中立衣装の実現でもあった。未来派の一人が「輝く未来派の旗、三色」の衣装を着た姿も見られた。当初想定したのは3着であったが準備が間に合わず当日は一着をカンジェッロ（F.Canziullo）が着用した。彼は1914年の初頭に未来派服を着用し、先導者でもあった。もともとは9月に行われたミラノでのデモストレーションの後ローマにむけて企画されていた衣装は3着（一着はマリネッティ用、一着はカンジェッロ用、一着はバッラ用）であった。3着ともデザイン、ラインが異なり、色は赤、白、緑、そして生地にはフランネルが使用された。当時の新聞、コリエラ・デッラ・セーラ紙によると「未来派カンジェッロは着席し、ポケットから大仰に白、赤、緑の帽子を取り出すと耳まで深々とかぶった。そして外套を脱ぎ、格好のいい未来派衣装を見せたが、やはり同じ色使いであった。一同の反応をどう表現していいものか。叫びやら、口笛やら拍手の渦で思いがけない出で立ちの未来派カンジェッロの出現を歓迎したのだった[25]。」このローマ大学サンエンツァ校でのパフォーマンスの後、一同はマリネッティを先頭にカンジェッロを胴上げし、サンピエトロの建築学部へ行列で向かった。ローマでの他のデモストレーションも加わったが、このファッションショーの一団が最も注目されたいた[26]。

バッラが未来派の一員としてその理念に忠実であったのは1912年から数年の間に留まる。戦後間もなくミラノで開かれた展覧会では帽子を

デザインし「未来派ファッション」部門に出品している[27]ものの、1919年以降はイマジネーションと芸術への関心が弱まり、家具や置物など実用品のデザインに移行していった。一方、未来派全体の動きとしては1918年の第一次世界大戦終結とともに次第に終焉へと向かっていった。

未来派はもともと言葉で表現することに始まり、時間を経て芸術上の表現を見出していった。従ってある意味では理論が先行していたと考えられる。二つの衣装宣言の中でも難解な未来派的表現が多く用いられ、創作した衣装そのものとしてはわかりやすいが、時折書かれたものと作品が結びつかない部分もあった。それがこの改革を成功させるに至らなかった理由のひとつかもしれない。しかしながら、未来派スーツの独特な発想と創作は、今でも引き付けられる。

未来派が試みたメンズファッションの改革は、スーツだけでなく装飾品にまで及び、バッラだけでなく、デペーロ F.Depero、タイアート E.Thayaht、シーテ D.Site、クラーリ T.Crali、ドットーリ Dottori らによっても進められた。彼らのプロジェクトと多数の作品及びデッサンが残っており、次回は続編として、それらを検証していきたい。

最後に、本稿の執筆に際し懇切な御指導を賜った辻ますみ教授、そして貴重な御助言を頂いた道明美保子教授、またイタリア語翻訳で全面的に御協力を頂いた翻訳家佐藤公子氏に深く感謝申し上げる。

註

1) ウンベルト・ボッチョーニ（Umberto Boccioni 1822-1916）　1910年に未来派画家宣言に著名してから1914年まで同派の理論の中心的担い手として活動。
ジーノ・セヴェリーニ（Gino Severin 1833-1966）1901年ローマでバッラと出会い教えを受けた。1906年以降はパリで活動。
カルロ・カッラ（Carlo Carra 1881-1966）1908年ボッチョーニと出会いその後未来派の一員となった。
ルイジ・ルッソロ（Luigi Russolo1855-1947）未来派画家宣言に著名する前はマリネッティの「ポエジア（ミラノを本部とする文芸誌。未来主義を予告するような詩を仏語で発表）」グループで活動。
2) 1996年7月22日から9月15日までモスクワのプーシキン美術館にてバッラ展を開催。(FabioBenzi, *Balla*. Milano, 1996)
3) 1997年3月から6月にかけてニューヨークのグッケンハイム美術館にて開催。（Germano Celant.*Art/Fashion*,1997）
4) 1998年10月から翌1999年1月にかけてロンドン、ヘイワードギャラリーにて開催。（*Addressing the century 100 years of art & fashion*,Hayward Gallery,1999）
5) Enrico Crispolti.*IL FUTURISMO E LA MODA*,Venezia,1986
本書は、男性服と女性服の革新に寄せる未来派の関心の推移を扱ったものである。バッラの多方面に渡る豊富な作品群やその他の未来派による様々なプロジェクトと作品について1910年代初頭から30年代末期を対象とし再考している。第一部をモードの再構成と題し、歴史的にみたモードにおける未来派の活動を再現し論じている。第二部では未来派の衣装だんす題し、衣装の品目ごとに未来派の試みを掲げ、個々の作家の独自性が認識されるように成っている。
6) ibid.,p.65
7) ibid.,p.66
8) ibid.,p.66
9) エドワード・ルーシー・スミス、篠原資明他訳、20世紀画家列伝、岩波書店、1995年、p.51
10) E.Crispolti.op.cit.,p.67
11) ibid.,p.68 1912年から1913年にかけて運動中の物体を表現する絵画に取り組む。1912年「繋がれた犬の力学」では女主人の揺れるスカートの裾の傍らで慌しく足と尾を動かしているダックスフントを,同年「バイオリニストの手」では奏者の手が幾つもの違った位置で連続的に動く様子を描き、運動の物理的現象を独自の様式で表現した。1913年「つばめの飛行」では、つばめが装飾的背景を連続的に横切るという動きを表現した。
12) ibid.,pp.68-69
13) ibid.,p.69
14) ibid.,pp.69-72

15）ibid.,p.72
16）ibid.,p.72同派は時折、既存の言語を変化させた「自由語」を用いていた。
17）E.Crispolti.op.cit.,p.72
18）ibid.,p.69
19）ibid.,p.74
20）ibid.,p.74
21）ibid.,p.79
22）ibid.,p.79
23）ibid.,p.79
24）ibid.,p.17
25）ibid.,p.98
26）ibid.,p.98
27）E.L.スミス、前掲著、p.52

参考文献

1）キャロライン・ティズタル＆アンジェロ・ボッツォーラ、松田嘉子訳、『未来派』、（株）PARCO出版、1992年
2）ジョルジョ・デ・マルキス、若桑みどり訳、『アヴァンギャルド芸術論』、現代企画室、1992年
3）『オックスフォード西洋美術事典』、講談社、1970年
4）井関正昭、『イタリアの近代美術』、（株）小沢書店、1989年
5）カーリン・トーマス、野村太郎訳、『20世紀の美術』、美術出版社、1972年

図版出典

Crispolti,E. *IL FUTURISMO E LA MODA*,Venezia,1986